

## ムラ仕事再考 - 共同作業と地域ニーズが生み出すやりがい -

先日、山形県庄内地方のある農山村で「道普請」という集落共同の林道の手入れ作業に参加する機会を得た。朝 8 時、地元の面々が機械草刈り機、手刈り鎌、熊手スコップなどを手に集落の林道入り口に集合する。その後、軽トラや徒歩等でいくつかの班に分かれて、手入れ作業が始まるのである。男は機械草刈り機で道の両側の草を刈り、女は側溝にかかった草を刈ったり、ゴミを拾ったりする。筆者たちヨソモンメンバーは熊手スコップで草を集めたり側溝にたまった泥を上げたりなどした。後半の作業では、道にかかった倒木の除去作業など結構な重労働も行った。

この作業は年 2 回、初夏と秋に行うということである。集落ではこれは昼仕事で、他に「朝仕事」と呼ばれる集落共同作業も 5 時ぐらいからあるという。この日も 5 時からの朝仕事に参加した後、道普請に参加した方もいるとのことで、昼仕事だけで疲れてぐったりしていた筆者たちを驚かせた。年間の中ではこうした仕事は他にもまだまだたくさんあるということであった。

それにしても山間集落の機能維持のためにはいかに数多くの仕事をこなさなければならぬかということである。こうした仕事は集落構成員による共同作業で行われる。しかし近年人が減ってさしもの普段鍛えている地元の人たちにとってさえも大変な重労働となりつつあるようだ。「もっと人がいればきめ細かに手入れができるんだけど、人が減ってくると維持するのが大変ですよ」とあるおじさんの言葉。別のお婆さんは「皆さんのように外部からお手伝いに来てくれると全然違うね、大変助かった」との声掛けを頂いた。筆者たち素人が大して役に立ったとは思えないが、こうした集落作業では少しでも人手があることが、メンタル的な意味でも効果を持っているのではないかと思う。

「山村の暮らしをしたいなどという人たちに私たちが伝えておきたいことがあります。それはこうした様々な仕事があって初めて集落が維持され生活が成り立つということで、暮らしの大変さもまた理解してもらいたいということですね、そのうえで山村に来てもらいたいですね。」今回活動に加わった筆者たちヨソモンに向けた言葉に集落の人たちの実感がこもっている

作業に加わってみて改めて考えさせられるのは、地域の切実な要請や必要がありそれが形となったものがムラの仕事なのだということである。筆者の長野の実家ではこうした共同作業を「オテンマ」と言い、主に集落の水路の手入れが仕事の中心的内容となっていた。火山灰地質の標高 400 メートルに位置する筆者の村では、総延長 10 キロ以上にもなる水路の維持がムラの生命線だからだ。

いや仕事は共同作業だけではない、最上川流域の村々を見ていると屋号にかつての仕事名を冠しているのをよく耳にする。「やねえ（屋根家）」は茅葺き職人、「ゲタヤ」は履物づくり、「クルマイエ」は水車作り、「カジヤ」は文字通り鍛冶屋など、ムラに必要な仕事というのを代々受け継いできたという形跡がその名前にはある。本紙面で以前紹介した最上

川の舟大工さんもまた江戸時代から続く職人家であると言えるだろう。

おじいちゃんたちにいろいろ話を聞いていると、このようなかつてのムラの仕事というのは、各個人が選り好みできるようなものではなかった。最初から定められ分担されて、受け継ぎ担うことが求められた。しかしそれはそれでやりがいを感じたものようだ。それは身近なムラ人たちの切実なニーズがあり、じかに目に見え感謝されるものだったからではないだろうか。

今、若者たちは地域コミュニティの希薄さの中で自分の「したいこと」「やりたいこと」を自由意思で探し、獲得していかなければならない。だが、ムラの仕事から見えることは、身近な周囲の切実な求めに応じて、自分の分担する仕事を決め、それを誠実に行うことで地域の必要を満たし、同時にそこに謙虚に自己の喜びを見出すということであった。

今という時代において、仕事をめぐる様々なトラブルを目の当たりにするたびにこうしたムラの伝統的な仕事のとらえ方から学ぶことがまだまだあるのではないかと思う。